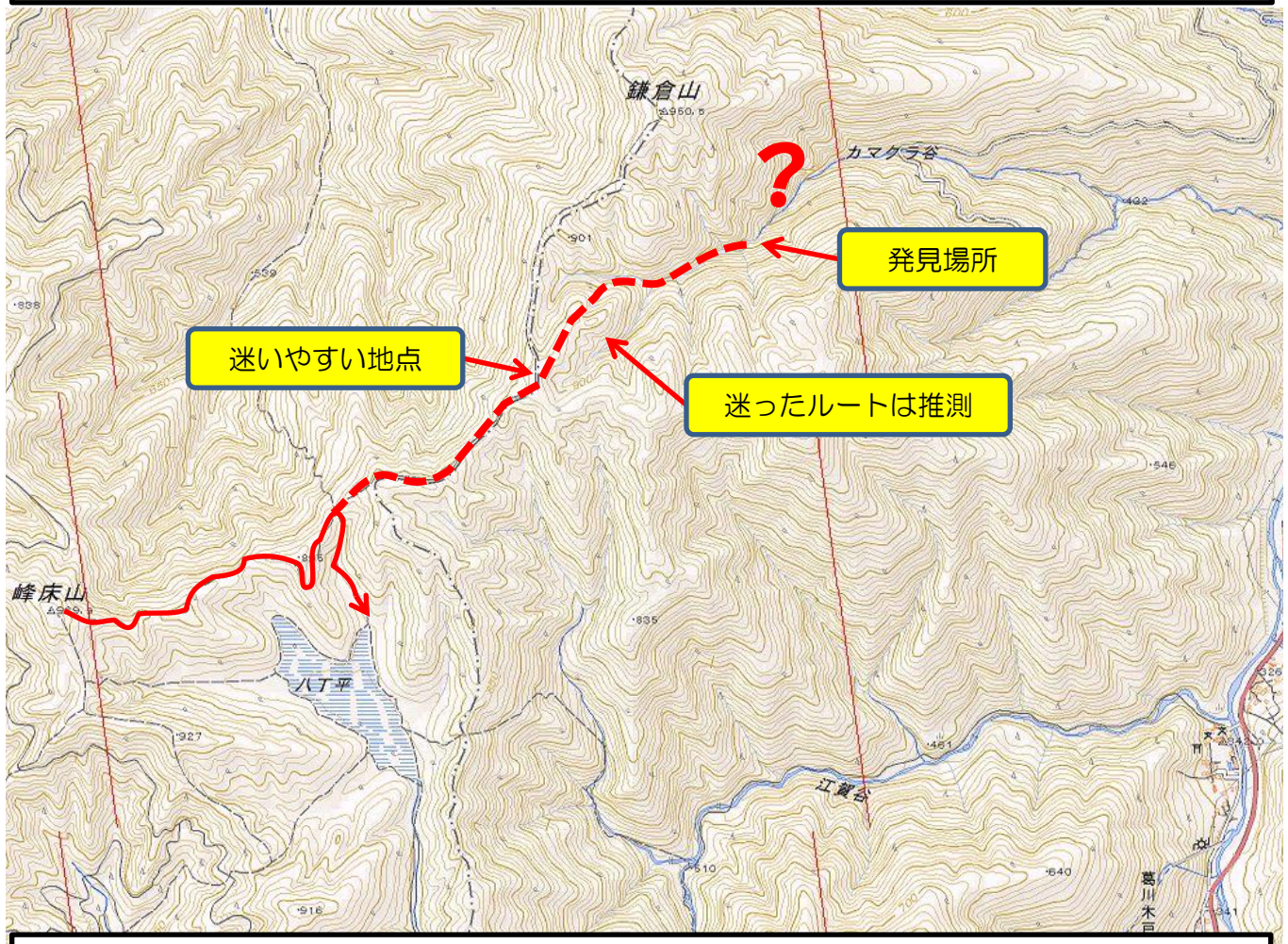


## 峰床山遭難(2007年9月)

道に迷い沢を下山したところ、足を滑らせて約10メートル下の滝壺に転落。動かず救助を待ったが、警察の捜索は7日目で打ち切りられた。翌日、遭難者の妹の同僚、山岳部のメンバー7名が個別に捜索したところ見付き、ヘリで救助された。



## 解説

道に迷ったため、沢沿いに下山したところ、足を滑らせて約10メートル下の滝壺に転落。自力で岸边へはい上がり、動かず救助を待つことにした。おにぎり1個とパン2個、あめ玉などで2日間を過ごしたが、それ以後は川の水でしのいだ。一方、妻は「夫が峰床山に行ったまま帰ってこない」と警察に届出。入山書から大津市の登山口から登ったと推測し、捜索をしたが、7日目で止むなく打ち切った。翌日、妹の同僚である山岳部のメンバーら7人が独自の捜索隊をつくり捜索。約3時間後、横たわりながら手を上げて助けを求める遭難者を見つけた。県の防災ヘリコプターで大津市内の病院に運んだが、命に別条はなかった。8日目の救助であった。

迷ったカマクラ谷は、峰床山から鎌倉山へ進むとカマクラ谷に迷いこんでしまう地形らしい。恐らく推測であるが、尾根を進むと上記の点線のように直線に進んでしまい、自然にカマクラ谷へ迷いこんでしまうのではないだろうか。道に迷った場合は、沢を下ってはいけない。なぜならば、滝があり、危険があるからだ。これは、道に迷った時の鉄則とされている。しかし、道迷いの不思議は、尾根を下ることを許さず、水がある沢を下ってしまう。このため8日間も山中に取り残されることになってしまった。沢を下らなければ、滝壺に転落せず、翌日に下山できたであろう。冷静な判断こそ必要である。